

野本京俳句（句集以後自選百句）2026編

句集『わたしがゐてもゐなくとも』以後

藤田湘子選「鷹」掲載句より自選百句

H2／6月号～H17／2月号

夜遊の蛤汁にはじまれり

H2／6月号

白魚のわが体内に果つるかな

水を打つしまひはいつも沖を見て

1 2 9 7

泪目にゴッホの書きし星月夜

夜が来て菊人形の病むにほひ

闇汁や吾を逃ぐるもの逃がしやる

3 / 1

くらやみに狂はざにゐる鏡餅

軽暖の墓をめぐりて誰もゐず

5 3

石楠花にしやくなげいろの雪あり

8 5

逃亡の吾を容れしめず罿栗畑

9 8

夏至の月サロメの舞を汝に与ふ

3 3

あの山に今灼けるたる汝の墓

1 1 0

菊人形恋の修羅場をかぐはしく

9

なまぐさき蒲団なりけり紅葉宿

2

かくれなき遍路装束枯山に

5 / 1 1 0 4 3 2

温室しづく受けてわたしは何の花

4 / 1 1 0

踏切の向かうは黄泉か日の盛

星ひとつ海にこぼれし月の浜

教会の聖歌やわれの息足らず

5 / 3 2 0 4 3 2

恋のほかわれかがやかず花辛夷

はればれと寒林ありて入りがたし
身のうちの弦鳴り出せり芹の水
朝寝してからまつの風入れにけり
余所者に踏切鳴りぬ蝶の昼
羽蟻の夜宴たけなはの人憶ふ
新涼やしほからとんぼ交む音
茶の花に曖昧のゑみ残しけり
肩かけや遊びの終り月を見て
眉引けば元気がすこし雲の峰
荒荒と夜店の金魚放たれし
桜しへ降るやまつすぐ父を見て
くちびるのかたち衰ふ羽蟻の夜
蛇の衣闌の鏡に置きにけり
黄落や犬に嗅がれてむかう脛
着ぶくれの黒一色は強情か
マフラーーや首はさみしき溜るところ
土筆野やおのれ最も厄介な
春の月魚卵は華に煮えあがり
能面の眼の虚うる灯る春の風邪
海星より淋しきわれや石に座す
わが死後も笑ふ写真やいなびかり
実むらさき雨だれわれを眠らしむ
変哲もなき川誉めて秋の暮
もの思ふ鈍のろの汽車なり蒲の絮
櫻の芽パイプオルガン鳴る如し
満ちたれば欠けゆく月や袋蜘蛛
とうすみの涼しき色の止まりけり

1	9	7	2	8 /	1	1			7 /	1	1	9	8	4	6 /	1	1	0	8	6
0				1	2	0			2											

転職か否かカンナの緋なりけり
 草の花摘みつつ帰心ありにけり
 わが墓域摘み放題の蓬かな
 髪洗ふまなうらに罿栗咲き乱れ
 をらぬひとおもへと月の青葉木菟
 人待てば娼婦のごとし秋の暮
 校庭の冬木少女のわれがゐし
 愛すべき人を愛せり冬の草
 暖かし父にわが名を呼ばせたし
 眠れねば眠らず春を逝かせける
 哭ごころのなまなまと蛇泳ぐなり
 夢いつも叫びてをはる扇風機
 木の瘤の出すこゑあらむ盆の月
 花火の夜殺むるほどは愛すまじ
 くらがりに人待つならひ踊唄
 赤鱈に立ちたるあとは無口なり
 木枯や玻璃一枚の夜のかなた
 寒林やこころゆるびのうすなみだ
 綿虫や何に遊びしわが昔
 禅語ふと大根サラダ囁みにけり
 老のもの干す目出たさよ花辛夷
 春愁や小指入れたる耳の虚
 菜食の夜の朧となりにけり
 ぐづぐづとたやすきなみだ靄晦
 蝶荒しこの断崖をわれも発つ
 二樂章始まるごとし春のくれ
 亡きあとに生きてしあれば花疲

2026年（R8）1月1日

蝶の舌みささぎの水吸ひにけり
 見てをりぬ蠅虎の跳ぶ範囲
 烏瓜吾をかがやかす恋をして
 ちやんちやんこ孤独地獄の夜に入る
 炭をつぐ愛をはぐくむやうにつぐ
 花虻の尻の無防備めでたけれ
 春の鴨見てゐしわれのただよへり
 あしゆびを洗ふ孤愁や多佳子の忌
 茄子の花汝が絶望の何ならむ
 雲の秋死を待つ人に窓あけて
 泊らむか梟の鳴く森なりき
 山桜ふるさとへ橋いくつ越ゆ
 母のためつかふ時間や柿若葉
 半分は黄泉へかたむく涼み舟
 香水の完璧なれば近寄らず
 七月や象のにほひのやうな雨
 鶏頭の種を採りたる渴きあり
 あえかなる翳の吹かれぬ蛇の衣
 鬼灯のなかの混沌揉みにけり
 ほんたうは雲は何色秋の暮
 うら若きあをぞらありぬ百千鳥
 ゆく春の昼をねむりて吾を愛す
 わが踏めば道はありけり苜蓿
 蓑虫の蓑の中にも夜の来たり
 木の実落つはたとひとりになつてゐし

1	1	1	1	4	/	1	3	/	1	2	1	8	7
7	6	/	5	/	1	1	2	5	2	9	8		
/	/	2	1	7	5	1	2	0	9	8	7		
2	1								6	7			